

<p>日本—台湾研究交流「超高齢社会における高齢者のケアと支援のための ICT」 平成30年度 年次報告書</p>	
<p>研究課題名（和文）</p>	<p>高齢難聴者を対象としたインクルーシブ音デザイン：音環境の分析とガイドライン構築</p>
<p>研究課題名（英文）</p>	<p>A thorough examination and guideline establishment toward friendly sound design for elderly people with hearing degradation</p>
<p>日本側研究代表者氏名</p>	<p>寺澤 洋子</p>
<p>所属・役職</p>	<p>筑波大学 助教</p>
<p>台湾側研究代表者氏名</p>	<p>Yi-wen Liu</p>
<p>所属・役職</p>	<p>台湾清華大学 Associate Professor</p>
<p>研究期間</p>	<p>平成30年 6月 1日～ 令和3年 3月 31日</p>

1. 日本側の研究実施体制

氏名	所属機関・部局・役職	役割
松井 淑恵	豊橋技術科学大学 准教授	研究分担者
安 啓一	筑波技術大学 助教	研究分担者

2. 日本側研究チームの研究目標及び計画概要

本プロジェクトでは、模擬難聴技術を活用し、日本と台湾での音環境が高齢難聴者にとってどのように聞こえているかを把握し、さらに、難聴者にフレンドリーな音環境を検討していく。今年度は、日本と台湾でフィールドレコーディングを行い、音声・環境音データセットの制作をすること、模擬難聴システムの技術を共有し実験環境を構築することなどを目標とした。

3. 日本側研究チームの実施概要

2018年8月と9月にフィールドレコーディングおよび研究交流を実施した。8月にはつくば、東京、大阪での録音、9月には台北（台湾）、新竹（台湾）の街中の環境音を録音した。日本・台湾どちらにおいても、市民生活を反映するよう、公共交通機関、商業施設、市役所、病院、銀行などの生活に密着した音シーンを収録した。これらの音について、データ整理と音の大きさや音色などに関する分析を行った。

街中、特に交通音や警告音が、高齢難聴者にどのように受け止められているかを検証するために、模擬難聴を用いて、緊急性や危険性の評価を行う実験を開始した。難聴がある場合は、音量が下がるだけでなく、音色も変化するため、緊急性や危険性が低く感じられる可能性がある。また、若年性難聴者を対象に、環境音の音源を当ててもらったところ、慣れ親しんだ音の方が何の音なのか認識しやすい、ということが示された。

以上